

「ブラジルの茶園・茶産業」―日系移民の開拓の歴史

上原美奈子

「お茶で南の国々とつながる会」代表

1. ブラジルのお茶

ブラジルといえば珈琲の国として知られているが、2009年から2013年にかけての茶の消費量は毎年平均16%増加しており、現在では毎年3000トンもの茶葉が消費されるようになった。これは世界的にそうであるようにブラジルにおいても茶の健康面での効能が知られてきたことと、ブラジルの中間層の増加によると考えられていて、販売は世界平均の12%増しの勢いである。

ブラジルでお茶はCHAとかいて、「シャー」と発音する。同時にポルトガル語しか話さない現地の人にも「BANCHA」という言葉が流通している。サンパウロの日本人街リベルダーヂに並ぶ日本食レストランでは「バンチャデス」とお茶が出てくるが、それはいわゆる「番茶」というカテゴリーのお茶ではなく、日本茶＝緑茶＝BANCHAというようなイメージがある。日本では庶民的なお茶のイメージがあるこのバンチャという言葉が何故ブラジルでお茶を現す言葉として使われているのか、ブラジルのお茶の歴史を遡り、日系移民の築いてきた茶業の大きな功績を紹介したい。

2. ブラジル移民・ブラジルのお茶・岡本寅蔵クロニクル

- 1800年 ポルトガルの修道士がリオで茶樹の試作を行う。
- 1818年 ポルトガル皇室はマカオの中国人を導入、1920年王立植物園で栽培を始める。
- 1850年 奴隷廃止で3万トンの生産をあげた茶業も一気に衰退。
- 1892年 ブラジルは、日本及び中国からの移民導入の法律公布。
- 1893年 **岡本寅蔵、奈良に生まれる。**
- 1894年 移住斡旋を専門とする吉佐移民会社が移民導入について現地会社と契約。
- 1895年 日伯修好通商航海条約調印。
- 1897年 日伯両国が相手国内に公使館を開設。
- 1905年 杉村濬公使がブラジルに着任。コーヒー農場を視察しブラジル移住を奨励。
- 1906年 藤崎商会、日本製品を販売する「オ・ジャポン・エン・サンパウロ」を開店。

- 1907年 皇国植民会社とサンパウロ州農務局「3年間に3千名導入」契約に調印。

- 1908年 最初の移民を乗せた笠戸丸が神戸港を出港。158家族781名がサントスに入港。





- 1917年 大阪商船がパナマ運河経由の南米航路を開設。海外興業株式会社が設立。
- 1919年 岡本寅蔵、妻久江と共に博多丸で渡伯。青桐の苗を持参。
- 1920年 サンパウロ植物園の茶の種（シナ種）25粒をレジストロに蒔く。

- 1923年 関東大震災。被災者に海外移住の資金援助があり、翌年、110名が渡伯。
- 1924年 東宮御成婚記念事業で渡航費が支給され267名がカナダ丸で渡伯。
- 1924年 数キロの緑茶、紅茶を作るが売れずに頓挫。
- 1926年 日伯協会が神戸に設立される。
- 1928年 神戸市に移民宿舍が開設され、後に「移住センター」と改称。
- 1930年 ナショナリズム強化の輸入規制、岡本の紅茶がドイツ系軍人に好評。
- 1932年 日本から紅茶の機械と技師2人を招く。
- 1934年 セイロンでアッサム種を入手、レジストロでの栽培に成功。
- 1937年 海興が郷土産業振興として茶師を招聘
- 1939年 世界大戦の余波でインド紅茶に代わりレジストロの紅茶が代用され好景気に。
- 1940年 日伯文化交流協定を調印。
- 1945年 第二次世界大戦においてブラジルが日本に宣戦布告。終戦後、勝ち組と負け組の亀裂。

- 1950年 ブラジル紅茶が神戸博覧会で高い評価を得る。
- 1951年 日伯国交回復。
- 1952年 戦後初の駐伯日本大使君塚慎が着任。アマゾンに向けブラジル移住の再開。
- 1955年 日本からブラジルへの企業進出が拡大。日本政府、外務省内に「移住局」設置。
- 1955年 サンパウロ州400年祭で新産業開拓者異邦人54名中、岡本が唯一の日本人。





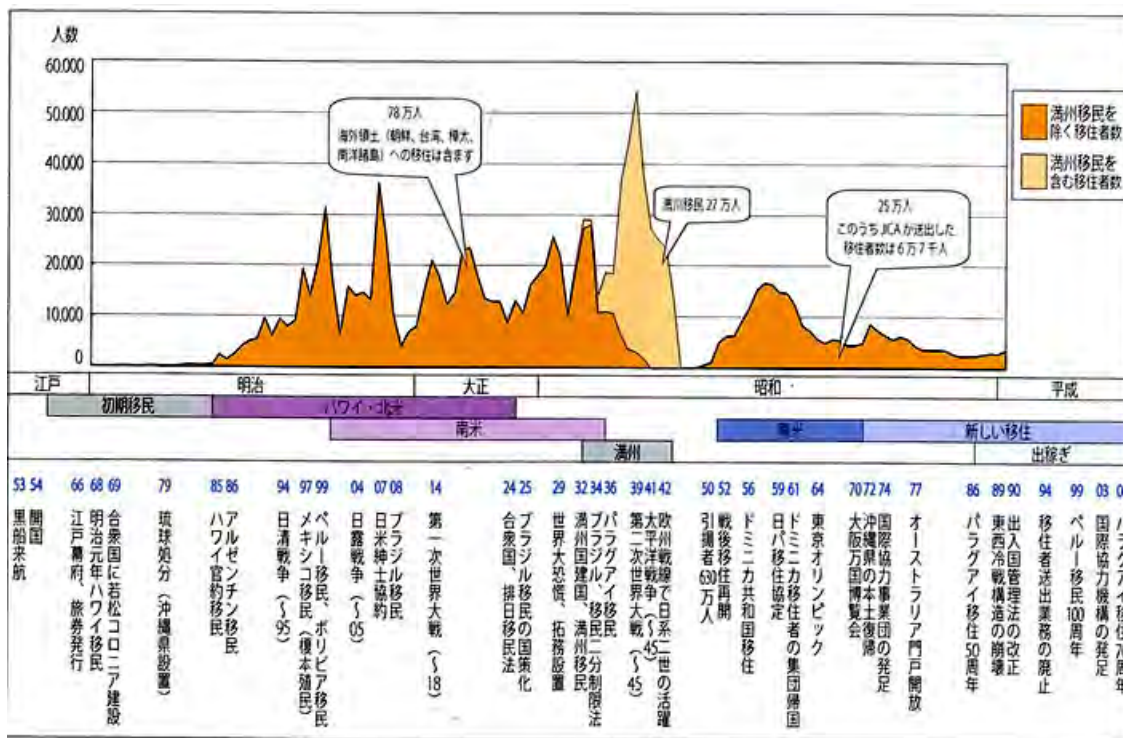
- 1956年 横浜に海外移住センター開設。
- 1958年 三笠宮御夫妻が日本移民 50 年祭に出席。バリグ航空が日本発着便を開設。
- 1959年 ブラジル石川島造船所（イシブラス）が操業開始。
- 1960年 農村電化に伴い米国資本の工場も参入。ブラジル茶の名を確立。**
- 1961年 日伯文化協定の調印。10月、ジュセリーノ・クビシエック元大統領訪日。
- 1963年 外務省外郭組織「海外移住事業団」設立。
- 1967年 皇太子御夫妻ブラジルを訪問。日伯関税条約調印。東芝や NEC が投資を開始。



- 1969年 日系人初の大臣ファビオ・ヤスタ就任。
- 1971年 日本経済使節団が「経済の奇跡」に湧くブラジルを訪問。
- 1972年 ブラジル銀行が日本第1号支店を東京に開設。
- 1973年 につぼん丸が移住者 285 名を乗せて横浜港を出港。航空機も使用。
「海外移住事業団」が「国際協力事業団」に発展。
- 1978年 JICA とブラジル政府、セラード開発協力合意。日本航空の日伯定期便就航。
- 1980年 ツバロン港とビラドコンデ港工事に 1 億ドル融資。岸信介首相 3 度目の訪伯。
- 1981年 田中龍夫通産大臣カラジャス産の鉄鉱石 1000 万トンを購入する契約に調印。
- 1985年 隣国アルゼンチンの紅茶に席卷される。**
- 1986年 日本向け最初の船積みアルミニウム 16,500 トンがアルブラスを出航。
- 1989年 日本の出入国管理法改正、日系ブラジル人就労者の受け入れ開始
- 1996年 在日ブラジル人の数が 20 万人を突破。
- 1997年 天皇御夫妻がブラジルを訪問。天皇としては初のブラジル訪問。
- 1999年 第 8 回日伯経済合同委員会で「21 世紀に向けた同盟関係」を構築。
- 2000年 為替変動に伴い国際競争力を失い次々と製茶工場閉鎖。**
- 2003年 国際協力事業団の独立行政法人化に伴い海外移住関係部門廃止。

- 2006年 ルーラ大統領及び小泉首相、日伯関係の拡大及び強化を確認。
- 2007年 シャーリベイラ社茶工場閉鎖により、日系茶業者は「天谷」のみ。
- 2008年 ルーラ大統領主催「日伯交流年」開幕。日本人ブラジル移住100周年を祝う。
皇太子殿下がブラジル日本移民資料館、サントス港などを訪問。

日本の海外移住者の変遷



出典：『海外移住統計 2006年10月 (国際協力事業団)』

1908年以来太平洋戦争までの33年間で、合計188,986名の日本人移民がブラジルに渡った。現在ブラジル国内に居住する日系ブラジル人は約150万人を数え、海外で最大の日系人社会を成す。一方、1980年頃からは移民の3~4世が日本に還流し始めた。1989年の出入国管理法改正に伴い、その数は激増の一途、現在日本国内で居住する日系ブラジル人の数は約32万人と推定される。

3. ジャポネースガランチード (Japones Garantido)



日本人であれば信頼できる、信用するに値する

レジストロで育ててきたお茶の品質がよい証拠：

- 1) レジストロで生産されるお茶は1946年280トン、1957年765トン、1966年8000トン、1981年には20000トンと目覚ましく増加した。
- 2) 最盛期には茶業に携わる人数が市の人口の三割にもなり、州知事も茶工場を参観しては伯国産業のためのさらなる茶業の発展を激励している。
- 3) 粗悪に走らぬよう、日本から技師を招いては改善を重ねてきた。

それにもかかわらず茶業が振るわない理由：

- 1) 国内の市場開拓の努力を一切してこなかったため、今、国内での需要が高まっているのにその市場に入れない。
- 2) 日本であるならば、茶農家の後継者が誰でも受ける茶業の技術や経営の知識を学ぶ機関がブラジルにはない。
- 3) 日本の茶業もこれから南米にも進出しようとしている。

30年代になって開業した「CHA AMAYA TEA」は、価格競争に敗れて他の茶工場がすべて閉鎖した今もお茶の生産を辞めない。かつて、祖先が大地を開拓したように、今度は世界市場を開拓する3世の意気込みを、現地のメディアも「さむらい天谷」と評して称えている。

紅茶だけではなく、「日本の緑茶」を高品質で南米から発信したいと、機械の開発に余念がない。既存のアッサム種（紅茶に適した品種）で緑茶をつくり、それを南米ならではのマテ茶方式で利用する方法は、すでに十分な評価を得ている。完全無化学肥料の畑で年8か月にわたって収穫できる好条件と拓魂で守る「歴史」を応援したい。

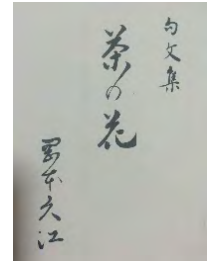
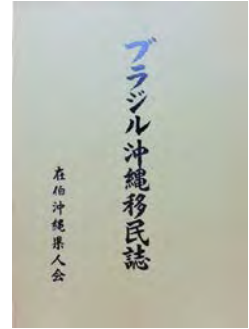
4. 美しい日本



天谷さんの挑戦は88歳の島田さんを再びお茶づくりに駆り立て、「おばあ茶ん」という紅茶を売り出しました。おばあ茶んを喫しながら日本を考え、また「おばあ茶ん」と「AMAYA Tea」を注文してください。

日系ブラジル移民をテーマにした本はたくさんあります。第一回芥川賞、石川達三『蒼氓』もそうです。

以下に何点か紹介します。



以上